

かがことう 加賀古陶

種 別	小松市指定文化財 考古資料
指定年月日	昭和 62 年 11 月 3 日
所 在 地	小松市立博物館

加賀古陶とは、平安時代末期から南北朝時代にかけて、小松市東南部の丘陵地で製作された中世陶器を指すもので、昭和 44 年（1979）、上野与一氏によって存在が確認された。

窯跡は、小松市西荒屋町・湯上町地内から加賀市箱宮町地内の、東西約 3.5 キロメートル、南北約 2 キロメートルの狭い範囲内に集中している。この分布は、平安時代後期に及ぶ須恵器窯の分布域と重なるものである。しかし前代の須恵器生産と比べると、窯の構造や焼成の方法が異なっており、尾張の常滑など他の地域との関連性も視える。

器種は貯蔵容器である甕を中心としており、壺、鉢を加えた 3 器種が生産された。集落内での生活雑器として日常的に使用されたとみられる。

また加賀古陶には押印がつけられているのが特徴的である。格子形、花文、弧文などがあり、生産された窯を特定する重要な指標となりうるものである。指定物件のうち、牧口町出土の甕には幾何学文の押印が、軽海町の中世墓出土の壺には花押状のへら描き文がみられる。

須恵器と古九谷の間の時代に生産されたものとして、本件は中世南加賀の窯業史研究の上で、重要な資料となるものである。



花押文壺

(壺の肩の部分に花文の押印が入る)



指定となっている 9 点



甕